

いたやだより No.100

いたやだよりも早や100号となりました。2011年6月から発行し、8年半経ちました。「いたやだよりを毎月見てるよ」という嬉しい声に支えられて、ここまで続けてくることができました。ありがとうございます。ご意見等ありましたら、お知らせください。令和2年、2020年になり早や1か月経ちました。今年は暖冬なのか雪もあまり降らないようで、ちょっと安心ですね。しかし、例年通りインフルエンザも出ていますので、体調には十分気をつけて下さいね。

～お知らせ～

2020年4月より、板谷医院2階（旧デイケアふれ愛）にて、整形外科の診療を始めることになりました。

診療は、月、火、水、金、土曜日9時～18時です。

（木、日曜、祝日は休診）

※尚、注射や物理療法(電気療法など)中心で、リハビリは行っていません。

～お知らせ～

インフルエンザが、流行っています。

熱の高い方、頭痛、関節痛などインフルエンザ症状の方は、申し訳ありませんが、待合室を避けて、廊下の奥でお待たせすることになっております。

又、インフルエンザの患者様は、点滴を控えて頂いております。

気分を悪くされる方もおられると思いますが、何卒ご協力の程お願い致します。

2019年(令和元年)12月27日の北國新聞に掲載されました。

新薬で副作用少なく

薬物療法は点滴や内服薬などで腫瘍の増殖を抑える治療です。腫瘍のある部位によって効果のある薬剤は異なり、必ずしもすべての人に薬効があるとは限りません。患者の状態を見ながら、適切に処方する必要があります。今回は、近年新薬として注目されている、分子標的薬と免疫チェックポイント阻害薬について紹介します。抗がん剤が薬剤を全身に行き渡らせるのに対し、これらの新薬は特定のがん細胞を狙い撃ちできるため、副作用が比較的少ないとされています。分子標的薬はがん細胞の増殖に関わる分子に直接作用し、70～80%の確率で腫瘍を縮小させることができ、阻害薬は患者の免疫機能が

増殖するがん細胞の増殖に直接作用し、70～80%の確率で腫瘍を縮小させることができ、阻害薬は患者の免疫機能が

増殖するがん細胞の増殖に直接作用し、70～80%の確率で腫瘍を縮小させることができ、阻害薬は患者の免疫機能が



講演3

日進月歩のがん薬物療法

大坪公士郎氏（金沢大学附属病院 外来化学療法センター長 講師）

ん細胞をしつかり攻撃できるように手助けします。これらの新薬により、抗がん剤では回復が期待できないステージ4の重篤な患者が劇的に回復することもあります。一方で、分子標的薬は再発の多さ、阻害薬は患者の20～30%ほどにしか効果が現れない不確実性が課題となっています。

実際の治療では、抗がん剤、分子標的薬、阻害薬を組み合わせることで処方します。肺がん、胃がん、大腸がんなど部位ごとに効果的な薬物療法についての研究が進んでいます。第2部のテーマである、がんゲノム医療の発展によって、より優れた新薬の研究や開発が加速することが期待できます。

大坪先生は、毎週金曜日午前中に診察しています。